

# 教職課程におけるシティズンシップ教育の研究実践 —対話・参加を鍵とした「生徒指導の研究」におけるプロジェクト学習—

中 善 則

キーワード：シティズンシップ、対話、社会参加、協同、生徒指導、教員養成

## 1 問題の所在

筆者は、学校教育のあらゆる教科・領域を通して、生徒が、多くの人々と対話を交わし、理論的に裏づけられた協同学習によって、生活からうまれた本当に知りたいことについての「知」を構築し、よりよい社会を目指して行動できるシティズンシップを育成してゆくべきであると考えている。そのようなシティズンシップは、民主主義社会を維持・発展させていくため必要な資質であり、日本でも、その育成を目指して先進的に実践を進めている学校もみられる。

唐木清志の最近のシティズンシップ教育についての「報告」をまとめると、まず、今までは社会の変化に「適応」する教育を行ってきたが、今後求められているのは、社会の変化を「創造」する教育であること。次に、教育関係者は、誰もが笑顔で暮らせる社会を創造するために社会形成に関与し積極的に社会参加する人材の育成を追究し続けなければならないので、学校教育におけるシティズンシップ教育の役割は重要になっていくということ。それゆえ、「市民性教育」と訳されている「シティズンシップ教育」という言葉は、「社会形成・社会参加に関する教育」と訳すほうがベターであること。最後に、しかしながら、日本においてシティズンシップ教育が市民権を得るにはもう少し時間がかかるので、今は、「シティズンシップ教育らしき実践」を数多く収集し、その可能性を追究し、「点」として存在する現在のシティズンシップ教育実践を「線」で結び、最終的には「面」にまで発展できるようにシティズンシップ教育のネットワークを構築することが必要である、<sup>(1)</sup>ということである。

では、どのような実践が、シティズンシップを育くむ取り組みとなるのだろうか。筆者は、実りある実践となるためには、「対話による知の構築」と「現実社会への参加」が必須なると考えている。つまり、シティズンシップ教育の授業構想のなかに、「対話」と「参加」の過程を組み込む必要があると考えるのである。

さらに、大学における教職課程で、学生がそのような二つの鍵を構想に入れた授業に参加することは、二重の意味で重要である。一つは、学生自身が、対話を中心とした学びをあらためて経験し、よりシティズンシップを向上させるため。二つは、その指導法を学ぶためである。

そこで、筆者は、昨今、国内で議論が沸騰している「いじめ」問題を扱う教職科目「生徒指導の研究」で、生徒指導に関する理解とともにその基盤となるシティズンシップの向上とその指導法を学ぶため、「いじめ」とは何かを仲間と探究し、「いじめ」事象を減らしていくために自分たちに何ができるのかを考え、行動することをめざす授業を構想した。「生徒指導」とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」であり、「児童生徒自らが現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導力の育成を目指す<sup>(2)</sup>」ことであるならば、それは個別の学びではなく、集団的なかかわりを必要とするだろう。「生徒指導」について、教員と学生がその意義を共に探究し、なかでも「いじめ」問題について大学内外の多くの人々と対話し、考えたことを世に問うという学びを通じてシティズンシップが育成できると考えたのである。本稿は、筆者の提案する「対話」と「参加」を必須とするシティズンシップ教育の理論的枠組みとそこから導かれる授業モデルを示し、「生徒指導の研究」の授業を通して、その具体的実践の結果を検証するものであり、この作業により今後のシティズンシップ教育研究の次なる課題を明らかにするものである。

## 2 めざすシティズンシップ教育とは

### (1) 社会参加にひらく「対話」を～協同的なオープンな授業

先にも述べたとおり、シティズンシップとは、民主主義社会を維持・発展させ

ていくための必要な資質であり、人間は、この多様な人々が生きる社会において異なる立場の声を丁寧に聞き取りつつ、よりよい社会をめざして共に考え、何らかの方策をさぐって生活していくものである。そのために、学校段階から、授業を「対話」を中心としたものに転換し、「共同の知」を産み出す学びを展開する必要がある。そもそも、授業に「対話」が必要であることに異論を挟む者はいないだろうが、その際、対話の対象を教室内に限定するのか、外部に開くのか、さらには、直接の社会参加まで視野に入れるべきなのかについては、論者により違いがみられる。まず、この点について考察していこう。

お茶ノ水女子大学附属小学校は、教科「市民」を創設し、研究テーマを「交響して学ぶ子を育てる～異質性が行き交うシティズンシップ教育」とし、シティズンシップ教育のあり方を研究・発信している。同小は、研究テーマに関して、「『交響して学ぶ』との関連で言えば、一人ひとりの考え（声）は、対等な関係で独自の色合いを保ちながら複雑に絡み合い、ポリフォニー（多声）となって重層的に豊かに響きあって全体の調和を創り出す。そこは言葉だけでなく、身体的な響きあいも起きる。このような経験を積み重ねることが、異なる文化や生活背景の他者とともに、民主主義の主権者である市民としての態度を育むもの<sup>(3)</sup>」であると考え、あらゆる教科で、児童に徹底して根拠を明確に示して発言させ、それを聴きいれたうえで議論を行い、意見の分かれる課題や問題に自分たちで「折り合い」をつけて一致点をみいださせるといふ、文字通り交響して学ぶ授業づくりをすすめている。

ところが、同小の授業計画では、児童の交響する空間は学校内に閉じていて、現実社会へ参加する学びは構想されていない。しかし、シティズンシップ育成のためには、教室内での「対話」だけにとどめておくだけで十分なのだろうか。水山光春は、同小の取り組みを「公民的資質あるいはシティズンシップをどうとらえるかという難問に、お茶の水女子大学附属小学校の『市民』が果敢に取り組み、一つの解答を示してくれたことは間違いない<sup>(4)</sup>」と、その実践を高く評価しつつも、シティズンシップ教育論としては再考すべき点もあるという。それは、現実社会への学習から生み出される「批判」が、教室内に閉じてしまっていることである

とし、「小学校という発達段階を考慮しても、現実社会とのダイナミックな相互関係としての『積極的シティズンシップ』とは少しニュアンスが異なる<sup>(5)</sup>」と評している。その水山の評価に対し、同小「市民」科の岡田泰孝は、「実践・参加型シティズンシップ教育には、一步間違えると『動員型』シティズンシップ教育に容易に転化する危険性が潜んでいる<sup>(6)</sup>」と述べ、「『参加』はあくまで結果であり、『参加』することを目的とした教育活動を組織するべきではない。むしろ、教室という空間を『公共性』のあるものに組み替えること<sup>(7)</sup>」が重要視することであり、授業に「参加」を予め位置づけるべきではないと言う。社会参加は、児童が学習の結果、自分たちから行動したいという欲求をもてば行えばよいというスタンスである。同小独自の課題や小学生の発達段階も踏まえての議論だと推察するが、それでも、筆者は、そのような「対話」がなせる集団ならこそ、その学びを社会に開き、社会の人々とともに社会的課題について対話し、行動することまでを授業計画に含むべきでないかと考えるのである。授業は、教員と子どもが共同で構成し、共同で決定し、共同で責任を負うべきものである<sup>(8)</sup>ので、教員側から提案し、子ども側が同意する場合があっても問題ないのではないかと述べている。

この点に関して、教員と子どもの関係性並びにそこから派生する教授コミュニケーションについて考察している木下百合子の「協同」学習についての論考が参考になる。授業を「コミュニケーションと協同」事象として理解することが重要という木下は、「協同」概念について、「コミュニケーションは、人間と人間の間<sup>(9)</sup>に成立する。そして、成立するコミュニケーションが人間と人間と一緒に作り出すものであるならば、当然、人間と人間の『関係の質』が問われる。この質を表現するのが『協同』である<sup>(8)</sup>」とし、「協同」とは、「一緒にするという意味での共同でなく、むしろ『対等に関係すること』<sup>(9)</sup>」を意味するものであるという。続けて、「協同」について木下は、「授業におけるコミュニケーションは、教師を中心に展開する『コミュニケーション儀式』となっているのが現状である。『協同』は、この教師中心に展開され、儀式化された、『人工的な』コミュニケーションを、できるだけ『自然な』、『対等』な、コミュニケーションにふさわしいものに作り変えようとする志向性を示している<sup>(10)</sup>」と述べ、「対等性」を特に重視して、授業で協同

関係を創造するべきであるという。つまり、授業とは、「それを構成する人間にとって、『共同構成、共同決定、共同責任』を原理とする事象<sup>(11)</sup>」であると考えてるのである。

そして、そうであるならば、協同関係を産み出すためには、教員主導の伝統的授業ではなく、オープンな（開かれた）授業におけるコミュニケーション活動が必要となるだろう。さらに、木下は、そのようなオープンな授業は、「実践的には、学校と地域、そこでの子どもを取り巻く人々との相互関係のなかで、学習と生活を統一的に経験することを可能<sup>(12)</sup>」にするものであるとし、その「協同」関係は生徒と教員間のみならず、地域住民などへ連なっていくことを示唆している。それゆえ、学校と授業をオープン化するということは、教室の密室性を解放するものであり、同時に子どもの人間関係を多様化することと結びつき、子どもがより多くの教師以外の大人と対話する可能性が拓けることであるという。よって、オープン化された学校と教室は、「子どもにとって必要な学習と人間関係を結ぶ可能性を追求する場（意味空間）となる<sup>(13)</sup>」のである。つまり、木下のいうオープンな授業とは、子どもを、「同年齢の子どもたちと、そして落ち着いた思慮深い大人との関係のなかで、多様な問題について考え、対話し、新たなことを発見し、吟味することを通して成長<sup>(14)</sup>」させるものとなる。そして、そうならば、この空間は、子どもと大人が市民として協同して何らかの社会的な問題に対して立ち向かい行動（参加）する場、つまりシティズンシップを育成する場となるのであろう。以上、授業における対話の対象の検討を端緒に、木下の「協同」概念を学ぶことにより、教員と子どもの授業における関係性及び社会参加にひらく「対話」の必要性が明らかになった。この点をあらためてまとめれば、シティズンシップ育成のためには、教室内外の多様な人々を包摂する交響空間で、共同の知を紡ぐための「対話」と、現実社会への「参加」を視野に入れた協同的なオープンな授業が求められているということである。

## (2) 授業過程に「参加」を～ユネスコ・テキスト

前項で、授業に「対話」はもちろん、それに加えて「参加」が必須であることを示したが、それでは、次に、オープンな授業の過程に何らかの「参加」を組み込ん

でいく方策について検討してみよう。というのも、国内では、学校の教育課程のなかで、直接の社会参加まで踏み込む実践はあまり広がりを見せていないからである。では、この状況をどう打破してゆくのか。すでに筆者は、自身の実践例を引き合いにだし、社会科等において行動までを含む社会参加学習の必要性について考察しているが<sup>(15)</sup>、より一層のアクティブな社会参加型学習の理論研究や実践成果の発信が求められよう。その点で、学校の中で活発な市民を育てるための取り組みや生徒の地域・国際活動などのさまざまなアクティビティを、「世界中の教師に届くことを願って」編集されたユネスコ刊行の教員研修用テキスト「持続可能な未来のための学習」<sup>(16)</sup>（「Teaching and Learning for a Sustainable Future」）は、広く読まれるべきである。このテキストには、「CITIZENSHIP EDUCATION」として、「シティズンシップ教育」が章立てられ（第7章）、積極的な社会参加についての先進的な学校の実践紹介や教科を越えたカリキュラムにおける学習を計画する方法などが記述されている。この第7章では、7つのアクティビティが紹介されているが、なかでも、筆者は、授業過程に「参加」をもたらすものとして、「Acting locally - acting globally」と題するアクティビティに注目した。その項の中には、表1のように、「ローカルアクションを計画する時の10の重要なステップ」として、社会的な課題について学生が何らかの行動をする際の重要なステップをまとめた記述がある。このような丁寧なステップの紹介や実践例を提示することで、日本でもあらゆる学校段階で社会参加学習が普及していくものと思われる。これらを参考にした実践計画を作りたい。

さらに、その「10のステップ」の中の一つとして、「Media Exposure（メディアを活用・創造する）」（表2に別掲）という項目が記されていることも特筆されてよい。このことは、ユネスコが、シティズンシップ育成のためにはメディア教育を必須のものと捉え、その推進を提言し続けている証左でもある<sup>(18)</sup>。というのも、ユネスコは、メディア教育の要諦を、メディアの情報を批判的に読み解くことともに、メディアをコミュニケーションの手段としてよりよき社会づくりのために活用していくものである、と捉えているからである。それゆえ、表2に示しているように、対話によりつくりあげたメッセージを、既存のメディアに発信するだけでなく、自らメディアを創造し発信していくことが、シティズンシップ育成に

**表1 ローカルアクションを計画する時の10の重要なステップ**

※「Teaching and Learning for a Sustainable Future」より筆者訳出。〈 〉の表題の後にそれぞれを解説した記述もあるが、ここでは省略した。

- ① **問題と目標を特定する**  
 <問題を絞る>  
 <具体的で、シンプルな目標を設定する>  
 <地元の小さな目標から始める>
- ② **活動の対象を特定する**
- ③ **サポーターをみつける**
- ④ **学生の興味を把握する**
- ⑤ **現状を分析する**  
 <誰と何があなたの力となりますか?>  
 <あなたに反対する考えはどのようなものですか?>
- ⑥ **連携をつくりあげる**  
 <他にどのようなグループが、あなたのグループと同じ変化を望んでいますか?>  
 <他にどのようなグループが、活動の対象に対して影響力を持っていますか?>  
 <慎重に連携をつくりあげる>
- ⑦ **仲間が楽しめるようにする**  
 <グループのアイデンティティを創造する>  
 <メンバーに報酬を与える>  
 <お祝い会>
- ⑧ **戦略と戦術を選択する**  
 <一度立ち止まって、考える>  
 <立案にメンバーを含める>  
 <メンバーと予算にあったアクションを選択する>  
 <戦術を考えて、総合的な戦略をデザインする>  
 <計画が合法的であることを確認する>  
 <時間を有効に使用する>
- ⑨ **メディアを活用・創造する (別掲)**
- ⑩ **努力を評価する**  
 <アクション計画を評価する>  
 <組織を評価する>

は重要な取り組みになるのである。

「メディアを活用・創造」する取り組みもまたシティズンシップ教育の実践計画にぜひ組み入れたい。<sup>(19)</sup>

### (3) シティズンシップを育む授業モデル

本節では、今までの議論を踏まえ、シティズンシップを育む授業モデルをまとめてみたい。その際、小玉重夫の「カリキュラムの市民化」(知識の批評化)<sup>(20)</sup>の構想が参考になる。小玉によると、従来の学校教育は、専門家がいてアカデミズムがあって、その代理人として教員がいるという構図があり、教員は真理の代理者として生徒の前に現れて教育を行い、生徒はそれを受け取るというものであった。しかし、今日、その状況に対して、「カリキュラムの市民化」が求められるという。そのためには、専門家集団と市民が同等な関係にな

**表2 ⑨メディアを活用・創造する** ※「Teaching and Learning for a Sustainable Future」より筆者訳出

- <あなたのメッセージを広げるためにマスメディアを活用する>  
 もし、あなたが、ラジオ・テレビ・新聞などのメディアを、特別なイベントに招待し、活動について新しい情報を発することができれば、あなたのメッセージを広げるのに効果的だろう。
- <あなたのメッセージを広めるために小規模なメディアを創造する>  
 あなたのメッセージを発信するために、リーフレットや他のグループへの訴え、または電話作戦を行う意義を侮らないでください。効果的なキャンペーンは、うまくターゲットを絞ったメディアの活用の組み合わせに成功しています。



り、教員の担うべき新たな役割は、両者を橋渡しするような存在になることであり、アカデミズムと市民の関係をより実質的なものにし、専門性の批評空間を開くことであるという。つまり、小玉は、このような批評空間の形成に、学校教育の新たな可能性を見いだしているのである。

この小玉の論考から援用し、今までの議論も踏まえて、今後求められるシティズンシップを育むための授業モデルをまとめてみよう。従来の授業の多くは、図1のように、専門家が持つ「知」を、教員がそのまま引き受け、それを生徒に伝達するというものであった。この授業像では、当然、現実社会を変革していく新しい「知」は生れず、生徒には人々はその社会に「適応」して生きていくものであるという考え方を埋め込んでしまうだろう。しかし、シティズンシップを育むことをめざす授業は、当然、従来の授業像とは異なるものになる。そのモデルを図2に示そう。まず、教員と子どもは、教員の指導性のもと、対等な立場で協同して授業をつくる。加えて、専門家や住民とも対話するオープンな授業を展開し、既存の「知」を単に受け入れるのではなく、現実社会を変革するためという目的をもった新しい「知」を構築していく。さらに、その知を活用し、実際に社会参加していく過程で、生徒たちは、「市民」へと成長していくのである。繰り返すが、このような授業モデル実現のためには、オープンな授業による知の構築と現実社会への参加が必須となるのである。なお、その指導を「シティズンシップ育成の鍵」

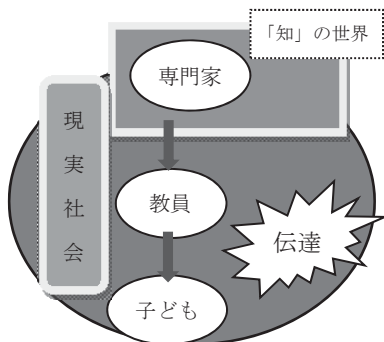


図1 従来の授業モデル

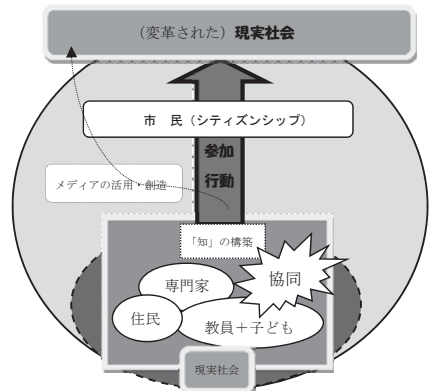


図2 シティズンシップを育む授業モデル



として、授業プロセスを細分化すると、(Ⅰ)対話を促す指導、(Ⅱ)協同学習による知の構築、(Ⅲ)社会参加の3項目に分けられ、この3点すべてが授業構想に組み込まれる必要がある。さらに、その際、メディアの活用・創造がとくに有効であることは、前項で記した通りである。以上、これまでシティズンシップを育むための授業モデルを検討してきたが、次章では、そのモデルに添った具体的実践の経過を明らかにし、その成果とそこから生じた課題を検証してゆく。

### 3 講座「生徒指導の研究」の概要と分析

#### (1) 授業構想と経過

本講座「生徒指導の研究」は、2012年度後期2単位、受講生89名で開講した。学生の内訳は、2回生が約4分の3、残るは上回生で、約半数が養護教諭免許をめざし、残る半分の学生は、中高の社会科、国語科、宗教科、福祉科、特別支援教諭をめざす学生である。授業は、表3に記したようなA~Dの科目のねらい、ユネスコ・テキストの「ローカルアクションを計画する時の10の重要なステップ」(表1)とともに、先に示した3項目の「シティズンシップ育成の鍵」に依拠して計画した。また、評価(単位認定)は、表3に記した項目で点数化した。

授業の概要を、表3にまとめたが、ここでは、第7回から9回のグループワークの授業を中心に記したい。そのねらいは、対話をうみだすためのグループ指導の詳細を明らかにすること、現実社会への行動計画(いじめを減らすための行動)作成の手順と「10のステップ」や「シティズンシップ育成の鍵」との関連を示すためである。なお、この3回は、キャリア教育コーディネーターとして活躍の角野綾子さんをゲストティチャーとしてお招きし、2人で担当した。角野さんには、ブレストなどのスキル指導を含めたグループワークから対話を促す指導を専門的見地からしていただいた。

表3 「生徒指導の研究」の授業のねらい（「いじめ」事象に関する部分のみ）と授業経過、評価項目

※ねらい		※シティズンシップ育成の鍵		
A・生徒指導についての基本的な考えを理解する B・「いじめ」問題について、事象を減らすためにできることはないかを考える C・グループ討議を進め、対話し、協同でいじめ問題に関する「知」を構築する D・班でまとめたことを発信・行動する		I 対話を促す指導 II 協同学習による知の構築 III 社会参加		
※授業経過				
回	テーマ	指導内容	ねらい A~D	「10のステップ」 <シティズンシップ 育成の鍵：I~III>
1	・オリエンテーション ・グループ決め・ワーク	・ゲーム感覚でグループ分けをし、自己紹介などを含めた簡単な討議の指導	C	
2	・いじめ事例研究～養護教諭の役割 ・今後のグループワークについて	・新聞記事より、養護教諭の役割を考察 ・アイスブレイクのスキル指導	A C	
3	・いじめ事例研究～ロールプレイング	・「いじめた生徒」「いじめられ軽いケガをした生徒」が一緒に保健室を訪れたという設定で、「養護教諭」としてどう対応するのかの3者によるロールプレイ	AC	
4	・講義 生徒指導の意義と原理①	・生徒指導の根本原理の理解	A	
5	・講義 生徒指導の意義と原理② ・<グループワーク①>①→テーマ設定	・生徒指導の根本原理の理解 ・グループで、発信目的・対象・内容の設定	C	④→⑤→①② ----- < I > < II >
6	・講演「生徒指導とSSW」（講師 大阪府教委チーフSSW：水川添綾さん）	・外部との連携した生徒指導のあり方の理解	A	
7	・<グループワーク②>（キャリア教育コーディネーター：角野綾子さんと） 前回までのふりかえり 発信目的・対象・内容の再プレスト&概要決定	・前回までのふりかえり ・テーマの再提示、発信の目的確認等 ・グループワークへのアドバイス	BC	④→⑤→①② →⑧⑨→⑩ ----- < I >
8	・<グループワーク③>（角野さんと） 発信内容のチェック	・発信内容に関するチェック・アドバイス	BC	⑧⑨→⑥→⑩ ----- < I > < II >
9	・<グループワーク④>（角野さんと） 発信内容の最終校正、発信	・発信内容に関するチェック・アドバイス	BCD	⑥⑨→⑩ ----- < II > < III >
10	・<グループワーク⑤> まとめ ・個人レポートの提出について	・発信作業を完成させ、行動計画をたてる ・行動を実行し始めた班の評価 ・今までのふりかえり	BCD	⑥⑨ ⑦ ⑩ ----- < III >
※評価項目				
出席、いじめに関する文献のレポート、グループワーク 3 回分のワークシート、グループで学習したすべての文献や調査をまとめたポートフォリオ、発信した内容物、グループワーク終了後の個人振り返りレポート				

I. 第7回の授業

1. 前回までのふりかえり <5分間>
2. テーマの再提示、発信の目的確認（※学生がより考えやすくするために）<5分間>
  - (1) 全体テーマ案の確認：「いじめ問題を解決するために 今私たちができること」
  - (2) 発信の目的確認： 実社会に働きかけ、他者からのリアクションをふまえて深めるため
3. 発信内容・発信方法の再検討…<シティズンシップ育成の鍵 I>対話を促す指導

(1) アイスブレイク (発想ゲーム) <5 分間>

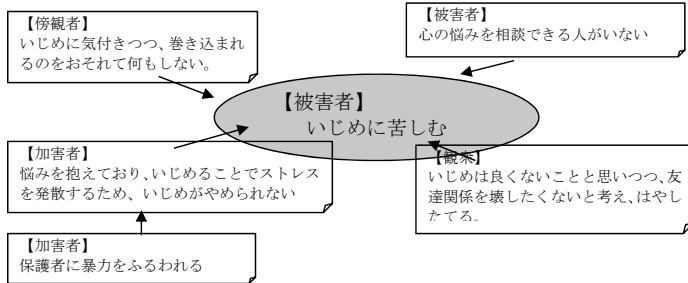
プレステーマ:「花大のいいところは?」「花大の良さを、一人でも多くの人に伝えるには?」

(2) 「いじめ問題の原因」分析<25 分間>

① 「いじめ問題の原因」のプレスト…**「10のステップ」4,5**

いじめの4層構造(被害者・加害者・傍観者・観衆)、各主体(教職員、地域住民等)の気持ち・立場を意識し、一人ひとりが付箋に書いて発表し、グループごとにまとめる。(一人あたり4枚以上記入、似た意見は近くに貼る、「原因の原因」など因果関係を明確にする)

(プレスト用紙例)



②自分のグループが働きかけたい「テーマ(いじめの原因)」を、1~2つに絞る。…**「10のステップ」1**

③今までの授業で考えたことや調べたこと、さらに今日のワークをふまえて、具体的なテーマと対象(4層構造・各主体のうち誰か)を決める。…**「10のステップ」2**

(3) 発信方法・内容の検討<30分間>

①発信方法のプレスト<20分間>…**「10のステップ」8,9**

- i) どんな発信方法(=第三者のリアクションをもらう方法)があるかプレスト<5分間>
- ii) それぞれの発信手段のよい点と注意しなければならない点をプレスト<10分間>
- iii) それぞれの発信方法についての留意点を説明<5分間>

②チームごとにワークシートに記入してふりかえる。<15分間>…**「10のステップ」10**

II. 第8回の授業

1. 前回&今回の授業についての説明<10分間>

(1) 今日の流れの確認

○前回のふりかえり、今回の目標を知る ○発信内容・方法について考える

(2) 「前回のワークの意図」を説明する。…**「シティズンシップ育成の鍵1」>対話を促す指導**

<背景>漠然と抽象的にしかイメージが浮かばず悩んでいるチームもあるようだった。

<目的>付箋で意見を出し合うことで、今まで学んだことをチームメンバー全員でもう一度「整理」し、自分のチームの「焦点を明確化」し、することを「具体的に」考えてほしかった。

<結果>できているチームと、もうひとひねりすると良くなりそうなチームがある。チームワークの良さには差があった。→全員がリーダーのつもりで主体的に参加を!

(3) 「今回の授業の目標」を説明する…**「10のステップ」8,9**

①整理・焦点の明確化・具体化ができていないチームはする(発信のワーク後に個別相談)

②発信内容・方法について考える(この後にワークを行い、すすめていく)

2. 発信方法・内容について考える<15分間>…**「シティズンシップ育成の鍵II」>協同学習による知の構築**

- (1) 前回の授業で出てきた発信手段それぞれのよい点と注意しなければならない点を各班で考える
- (2) 発信内容・発信方法についての留意点を説明
- ①発信によって誰か（他人・自分）が傷ついたり被害を受けたりしないか、事前に考えて対策を！
- ②今回の発信は大学や講座としての公式見解ではなく、グループの私的な問いかけになるため、行政組織等には、発信力が弱くなることに注意。加えて、実現可能性をしっかりと把握することも大切。
3. 相談&確認タイム<50分間>…**「10のステップ」⑥・<シティスキャン育成の鍵II>協同学習による知の構築**  
各班の個別指導にあたる。生徒指導についての原則の十分な理解を促すとともに、特に、**行動目標に沿った連携先の発掘や連携方法について助言する。**
4. チームごとにワークシートに記入してふりかえる。<15分間>…**「10のステップ」⑩**

### III. 第9回の授業

1. 今日の流れの確認  
○前回のふりかえり、今回の目標を知る ○発信内容・方法について考える
2. 相談&確認タイム<50分間>…**「10のステップ」⑥⑨・<シティスキャン育成の鍵II・III>協同学習、社会参加**
3. 個人レポート作成の説明…**「10のステップ」⑩**

## (2) 本実践の成果と課題

### ①各グループの発信・行動内容とその成果

表4 各グループのテーマと発信方法、発信

班	発信内容	発信方法	発信先
光	いじめを傍観している生徒へメッセージ	新聞	出身小・中・高校
今	いじめについての啓発と対策	インターネット	ブログ新設
生	加害者の家庭環境に関する研究	投稿	新聞社
時	地域社会圏（シェアハウス）という構想の提案をする	投稿	新聞社
走	いじめについての保護者、地域住民のチェックリスト	投稿	新聞社
健	いじめに対して、自分はどうのような養護教諭になりたいか	投稿	新聞社
広	いじめ問題に関連する対策と解決法	投稿	新聞社
教	見て見ぬふりをする子ども達へメッセージを送る	ポスター・訪問	円町児童館
文	いじめられた人の気持ちを教職員に伝える	投稿	新聞社
話	いじめに関する周りの大人のあり方について	投稿	新聞社
聞	子どもとコミュニケーションがとれているかチェックリストをつくる（対象：地域）	インターネット・投稿	Facebook, Twitter, 新聞社
睡	加害者が勇気を持っていじめをやめるよう、加害者にメッセージを送る	ポスター	出身中・高校、妙心寺系列の寺院
調	教職員が生徒の変化に早く気づくための資料配布	プリント	出身小・中・高校の先生

陽	担任がいじめに気付くためのチェックリスト作成	チェックリスト	出身小・中・高校の先生
気	コミュニケーションがとりづらい親子にアドバイス	投稿	新聞社
福	保護者・学生へアンケートを行い、いじめに関する意識調査を行う	アンケートまとめ	地域保護者・学生
幸	いじめに悩む中学生に学級新聞を作成	新聞	出身小・中・高校
歩	「いじている君へ、いじめられてる君へ」、各々のメッセージを直接伝える	メッセージ集(ポスター)	出身小・中・高校(計9校)に掲示
心	いじめが起こる原因と背景についてアンケート調査	投稿	新聞社
学	いじめが起こる原因について研究	投稿	新聞社
育	多忙感に追われる先生のためのすぐにできる教材を考える	学習指導案	出身小・中・高校
共	いじめの現状や見て見ぬふりをやめたい人のためのアクションリスト	インターネット	ブログ新設
正	いじめ撲滅を訴えるポスターを作成	ポスター	出身小・中・高校
太	家庭向けのチェックリストを作成	投稿	新聞社

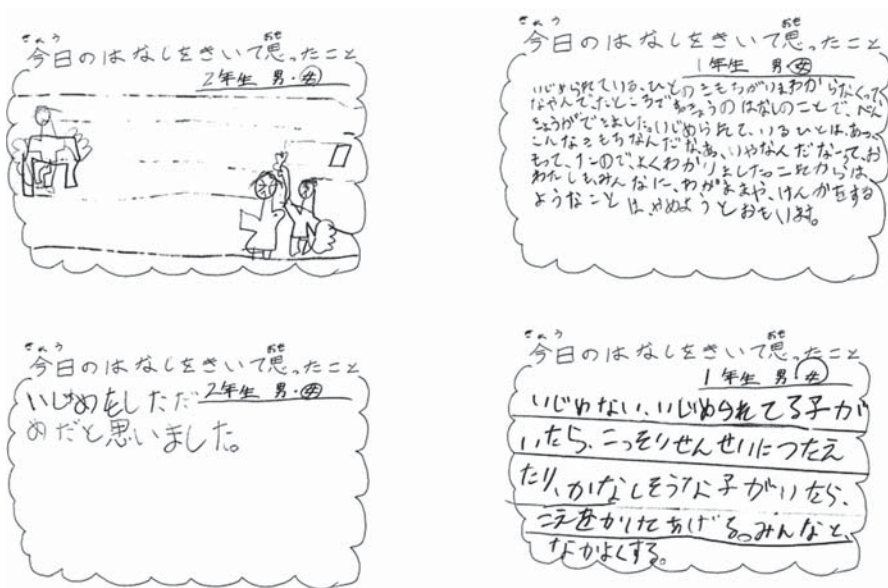


図3 児童が書いた感想



図4 作成したポスター



図5 出身高校での掲示

授業は、表3のような経過を経て、各班が表4のような発信・行動を行った。例えば、図3は、「いじめはダメだ」というメッセージを大学近くの学童施設へ、児童用に作ったポスターを持って話しに行き、その後、児童に感想を書ってもらった物の一部である。図4のポスターは、加害者が勇気を持っていじめをやめるようメッセージを送ったもので、出身中・高校、妙心寺系列の寺院に掲示を依頼した班の作品である。図5は、「いじめている君へ、いじめられてる君へ」と題し、各々のメッセージを書いたポスターを作成し、出身校に掲示してもらっている様子である。その他、大手新聞社に投稿したのが9班、出身校へ新聞（手紙）を作った班が3つ、小学生新聞へ投稿が2班、ブログやFACEBOOK等の電子メディアに発信した班が3つ、いじめ問題に関する学習指導案を作成し出身校へ届けた班、教員用チェックリストを作った班、いじめ撲滅を訴えるポスターを作成した班、アンケートを

とり地域保護者に配布した班がそれぞれ1班であった。このように、全24グループが、最終的には、なんらかのメッセージを發し、行動することができた。この点は、実社会に本当にアクションするというこの実践の構想、つまり筆者の提案するシティズンシップ育成の方法が、学生を本気にさせ具体的な成果を生んだものと評価できよう。また、SNSなどの活用は、新しいメディア教育の可能性と必要性を感じさせるものであった。

## ②学生へのふりかえりからみる成果と課題

本稿では、シティズンシップ教育で必須であるものは、「対話による知」と「現実社会への参加」としてきた。それゆえ、本実践で、「班内や行動の連携先や発信先との間で、対話により、いじめ問題について知見がうまれたのか（対話による知の構築）」、「参加（行動）により、いじめ問題に関して具体的成果があったのか（社会参加）」が検証されるべきであろう。学生が記した記録（グループでのふりかえりシート、最終個人報告書）の内、「グループ学習で大変だったこと、学んだこと、乗り越えたこと、乗り越えられなかったこと」の項の記述から主なものをとりあげ、本実践の成果と課題をあげてみたい。

### a) 対話による知の構築について

- いじめに関する問題を考え、整理していると、いじめの問題のほとんどが話し相手、相談相手がおらず、コミュニケーションが不足しているという問題から発生しているということに気が付いた。そこで、コミュニケーションというものにスポットライトを当てていじめ問題について考えることにした。
- 自分一人だけでは考えもつかないような意見やアイデアがたくさん出て、よい刺激になったし、お互いに共有できる気持ちや体験などを中心とした連帯感が自然と生まれてきてグループの繋がりができたように思います。それによってグループ内に活動意欲やポジティブな気持ちが育まれていき、自分の力にプラスして、一人一人に必要なことを自然と後押ししてくれることになりました。
- 一番最初の壁は、テーマを決めることでした。どんなテーマにしても、考えてみると意見が違い、また根本から考え方が違いました。「いじめ」ということに対して、どのようなことが「いじめ」なのかと議論する必要がありました。テーマを決めた後もそれぞれが反論し、なかなか先には進みませんでした。始めたころはテーマで争っていたのに、だんだんとまとまり、意見の食い違いが減ってくるようになり、一人ひとり本音でぶつかるようになったと思います。皆が同じ考えでないことや、自分だけでは出てこなかった考え方で視野が広がりがよかったです。



- 我々学生が、生徒が興味を持ちなおかつ指導が出来るような教材を考え、それを現場の先生に直に評価してもらえて良かった。反省点も明確に示してもらえたので、この反省をふまえてさらに良い指導法を考えたい。
- 毎日子どもと接している担任の先生でもいじめに気づかないことはあると思います。それが当たり前だとは思ってはいけませんが、現状はそうなってしまっていると思います。そんな現実の中、先生をめぐず私たちの考えをチェックリストに表して、現場の先生のアドバイスをいただきました。そして、さらに考えを深めることができました。
- 私は地域の学童保育所でアルバイトをしているので、その保護者にアンケートを協力していただけるよう紹介文を作りプリントを配り、アンケートに協力してもらい、集計して、そこから考察を深めました。

#### b) 「社会参加」について

- グループで考えた内容を子ども達なりに理解してくれたようで、子ども達に直接伝えることができ、小学生の素直な感想をもらえたことは、とてもうれしく、頑張ったかいがあったなと思います。
- 私は、母校の中学校・高校に（ポスター掲示）を依頼しました。卒業した今、こうして母校と関わって先生方と一緒に学校の環境をよりよくしていくのを実感できて嬉しかったです。
- 記事を投稿後、たくさんの友人、知人の方からコメントやフォローなどをしていただきました。記事を読んだ方が本文をコピーして、自身が運営されている Facebook のページに貼りつけて拡散してくれたり、短期間で数えきれない人たちが私たちの記事を目にとめてみてくれたはずで。コメントをいただいた中で、「以前、自分もいじめを受けていたことがあるので、一人でも多くの人に届いてほしいと強く思います」という言葉もあり、授業で取り組んだこの課題を無事発信できて本当に良かったと思いました。
- よかった点は、お子さんのいる家庭の親御さんから意見をいただけたことで、「あのコミュニケーションチェックリストがすべてうまく家庭なら、親は子どもの些細な変化にも気づくことができるだろう」という意見や、「月曜日の朝に子どもを見た時に、子どものモチベーションがわかる」などといった親目線の意見を得ることができた。このことから、私たちのグループが作成したコミュニケーションチェックリストは、家庭内、親子間のコミュニケーションで大切な点をおさえることができていたのではないかと、という自信をもつことができた。もう講義は終わってしまったが、次の課題があるとすれば、あのチェックリストを全く埋められなかった家庭は、親子間のコミュニケーションが不足している可能性が高く、そういった家庭向けに私たちは、「子どもとコミュニケーションを取る時間の大切さ」を発信していくべきだと考えた。
- （母校の高校へ手紙）プラス思考の考えもありましたし、マイナスの意見もありました。でも、自分たちが発信したことで、少しでも生徒たちの考えが変わったということがわかってすごうれしかったです。発信してよかったです。

まず、対話による知の構築について、学生のふりかえりを見てみると、学生たちは、「いじめ」に関する理解や発信・行動内容の学習に、始めは戸惑いながらも、いつしか壁を越え、連帯感を持ちつつ対話を深めていった様子がよくわかる。また、出身校の教員など専門家からの助言を受け、考察を深めた例が多々みられた。他には児童を含む住民からも示唆を得た班もあった。このように、学生は、班員に加えて専門家や住民との対話を実らせたことにより、課題に対して自分たちなり

の知見、及びその指導法を掴むことができたのではないか。専門家や住民との協同で構築した「知」は、既存の「知」を超え、新しい世界を創りあげる礎となろう。

さらに、そのような知を得た学生は、どのような社会参加を行い、何を学んだとふりかえているのか。出身校や児童館への訪問、保護者やマスメディア・SNS等への発信等の行動計画をやり遂げ、発信先から反応を得たことは、学生にとって大きな喜びであったことがよくわかる。自分たちが作りあげた「いじめ」に関するメッセージを、誰かが受け止めてくれ、いじめの減少に少しでも関わったという自信を持ったことだろう。発信先と自分たちの考えをすりあわせ、何らかの行動をする過程で、いじめに対する理解がより深まり、さらなる行動へと意識づけられていった様子が読み取れる。

以上、これら学生のふりかえりからも、本実践は、教室内に留まらず、多くの人々と対話を交わし、本当に知りたいことについての「知」を構築し、よりよい社会を目指して行動するというシティズンシップの伸長に成果があったといえるだろう。つまり、シティズンシップの育成に、「対話」と「参加」を必須とする授業モデルが有効であったと判断できるのである。

しかしながら、実践方法とその成果分析に関して課題も露呈した。現時点で考えていることを、四点あげたい。第一に、学生のシティズンシップの伸長を的確に実証する手立てが不十分であったということである。毎時のふりかえりを、主に、班単位でのシート記入にしてきだが、それだけでは個々人の学びの過程の把握が不十分になった。グループ学習当初、学生は、教員の予想以上に、班活動に苦勞していたようであるが、授業を重ねるごとに、どのような作用が起き、どのようなふんばりで対話を開けるようになっていったのか。つまり、一人ひとりが、何に困り、そこからどう乗り越えることができたのかを細かく記録させるべきであった。その記録が、シティズンシップがどう育成されていったのかの貴重な資料となっただろう。特定の学生の成長の分析や受講生全員のシティズンシップの高まりの数値データ等での把握も可能になったに違いない。次に期したい。

第二に、対話の質を向上させる協同学習の指導法の開発の必要性である。具体的には、授業で多様な方法で協同する場面を数多く組み込むことはもちろん、開

講当初から、対話に向けて信頼関係をつくるベースづくりのためにコミュニケーションの練習を行い、メンバーが互いの特徴を知りあうような機会を設ける「チームビルディング」、「相手を否定しない」、「共感的に聴く」などといった「対話のルールの徹底」、加えて、一人ひとりの役割の明確化及びその役割指導等がもっと工夫されるべきだろう。

第三に、授業終了前の「リフレクション」の方法開発が重要であるということである。これは、第一の課題としてあげた個別の詳細なふりかえりのことではない。ここでいう「リフレクション」とは、グループとしての目標や計画と照らしあわせての進捗状況のふりかえりのみならず、学習内容を深め、さらに、各人それぞれが、テーマや役割分担に関して、学んだことや感じたことを交流し合う活動のことである。つまり、自己評価だけでなく、相互評価までを徹底的に行う活動である。一人ひとりが、班と個々人の成長や課題を真摯に語り合うことができる指導法やワークシート等の開発に努めたい。

第四に、テーマ決定に関しての方法である。今回は、「いじめに対する行動を」というテーマで、各班、自由にその対象や方法を検討させたので、選択した行動は多岐に富んだ豊かなものになった。しかし、その結果、各班、追究課題が全く異なってしまったため、グループ間での協同はうまくいかなかった。つまり、クラス全体としての「知」の深まりがみられなかったのである。そこで逆に、全く違う進め方も考えられよう。例えば、発信対象を「保護者」に絞る、あるいは発信内容を「学習指導案作成」等に限定すれば、各グループで研究を進めつつ、さらにクラス全体でも検討していくことができるだろう。両者には一長一短があるので、指導者がそのことを事前によく学生に説明し、授業の構成を共同決定することが必要であろう。

#### 4 終わりにかえて

これまで、本実践の成果と課題を明らかにしてきたが、この取り組みで、ひとつのシティズンシップ教育のモデル例を示すことができた。このような授業スタイルは、大学だけでなく小・中・高、いずれの学校段階でも実施する必要がある

だろう。各教科や総合学習の中から、現実社会の課題を発見し、その変革を求めて、多様な人々と協同する。そして、その過程で、現実社会へ参加し行動してゆくことになる。このような経験を重ねてゆくことで、子どもたちにシティズンシップが育成されてゆくだろう。様々な実践を期待したい。ただ、課題も明確になった。本実践は、教職をめざす大学生であるがゆえに、各グループが教育的なねらいをもよく理解し自主的にふんばり、班内の対話をすすめてくれた。しかし、小・中学生が、今回のように充実した対話をうみだすことができるのか。それは、ひとえにグループ学習における協同学習の指導法の開発、とくに「リフレクション」の充実が必要になるだろう。どのようなふりかえりが、子どもにシティズンシップを育成する上で有効なのか、本稿を読んでいただいた方々と共に今後議論し合っていきたいと思う。

## 注

- (1) 唐木清志「シティズンシップ教育の可能性」『シティズンシップ教育が拓く未来とは?』日本シティズンシップ教育フォーラム (J-CEF) 設立記念シンポジウム資料 2013年3月17日
- (2) 『生徒指導提要』 1頁 文部科学省 平成22年3月
- (3) 『第75回お茶の水女子大学附属小学校実際指導研究会 発表要項』 68頁 2013年
- (4) (5) 水山光春「シティズンシップ教育」『教育の3C時代』世界思想社 杉本厚夫 高乗秀明 202～205頁 2008年
- (6) (7) 「社会的価値判断力や意思決定力を育む『市民』の学習」お茶ノ水女子大学附属小 209頁 2010年
- (8) 木下百合子「現代社会における『子どもの学び』再考」『Computer & Education vol.33』 CIEC (コンピューター利用教育学会) 17頁 2012年12月
- (9) 木下百合子「授業におけるコミュニケーション文化の創造」木下百合子・手取義弘編著『総合学習時代の授業論』ミネルヴァ書房 83頁 2002年
- (10) 木下百合子「現代社会における『子どもの学び』再考」 17頁
- (11) 同上論文 16頁
- (12) 木下百合子「授業におけるコミュニケーション文化の創造」 78頁

- (13) 木下百合子「現代社会における『子どもの学び』再考」 20 頁
- (14) 同上論文 20 頁
- (15) 拙稿「社会科における社会参加学習のあり方に関する一考察～中学社会公民分野新単元『よりよい社会をめざして』の授業構想試案」大阪教育大学社会科教育学研究 第 11 号 39～48 頁 2012 年
- (16) ユネスコ『Teaching and Learning for a Sustainable Future』「CITIZENSHIP EDUCATION」2010 年 [http://www.unesco.org/education/tlsf/docs/tlsf\\_doclist.html](http://www.unesco.org/education/tlsf/docs/tlsf_doclist.html) (2013 年 9 月 18 日 最終閲覧)
- (17) 7 項目は、以下の通りである。1.Participating in my community、2.Citizenship education for the 21st century、3.Active citizenship in schools、4.Acting locally – acting globally、5.Rescue Mission: Planet Earth、6.Citizenship across the curriculum、7.Reflection
- (18) 主なものとしては、1982 年に出された「メディア教育に関するグリェンバルト宣言」があげられる。その宣言では、「メディア・リテラシー教育はクリティカルな理解と能動的な参加を育成とすることを目的とする。それは、若い人たちがメディアの消費者として十分な情報を得てメディアを判断できるようになるだけでなく、彼らとその権利においてメディアの制作者となり、よって、社会への力強い参加者となる事を可能にする。メディアリテラシー教育は、若い人たちのクリティカルでクリエイティブな能力を発展させるためのものである」と述べられている。
- (19) 筆者のメディア教育に関する実践をまとめた論考は、主なものに、中善則・木下百合子「地域ミニコミ誌づくりを通じた社会参加学習」『社会科授業力の開発～中学校・高等学校編』 明治図書 日本社会科教育学会編 247～262 頁 2008 年などがある。あわせて参照されたい。
- (20) 小玉重夫「いま求められる政治教育と学校のあり方～シティズンシップ教育の観点から」民主主義教育 21 別冊『政権交代とシティズンシップ』 同時代社 56～58 頁 2010 年 6 月 から要旨をまとめた。また、近著の『学力幻想』 ちくま新書 168～169 頁 2013 年 5 月 にも、同様に「カリキュラムの市民化」について論述されている。